

第27回OMS戯曲賞選考経過 —2020年12月15日—

九鬼葉子

選考会冒頭、賞に推す作品に○か△を付ける投票で、全作品に印が付いた。珍しいことだ。今年は特にレベルの高い作品が揃う。山本正典作品が頭一つリードしており、今回は意外に早く結論が出るかとも思われた。しかし議論の過程で、山本に続くピンク地底人3号作品が、粘る、粘る、粘る…。多数決ではなく、徹底的に議論して決めるという意志確認がなされ、最後はこの2作品の一騎打ちとなった。一進一退。流れがいつ、どう変わってもおかしくない、スリリングな展開。5時間5分の激論の末、山本正典大賞、ピンク地底人3号が佳作に決まった。熱い議論をレポートしたい。

関西の新しい才能の発掘と、中堅劇作家にエールを送ることを目的に、大阪ガス株式会社主催、大阪ガスビジネスクリエイティブ株式会社の運営で開催されているOMS戯曲賞。扇町ミュージアムスクエアが閉館して17年になるが、戯曲賞は継続され、今回で27年を迎える。関西の劇作家の目標として、また新しい才能との出会いの場として定着している。

今回の応募作は54作。そのうち14作が初応募の作品。最終候補に残ったのは9作。最終選考会初登場の劇作家は一人で、ほかは過去の受賞作家も含め、最終候補に残った経験のある実力派が揃った。

選考会開始は午後1時25分。まず、最初の投票が行われた。○と△をいくつつけてもよいこととした。

| | 富 | 栗 | 田 | 十 | 苗 |
|-----|---|---|---|---|---|
| 植松 | | △ | | | |
| 小橋 | △ | △ | | | ○ |
| 中野 | △ | △ | △ | | |
| 植松 | | △ | | | |
| 中野 | | △ | | | △ |
| 植松 | △ | △ | △ | △ | ○ |
| ピンク | ○ | ○ | | ○ | |
| 山本 | ○ | ○ | ○ | △ | ○ |
| 植松 | △ | ○ | ○ | △ | |

1時36分、各作品の所見を述べるころから議論は始まった。

植松は、個性的な手法をどう生かしていくか

第24回には『午前3時59分』で、初応募にして佳作を受賞した立ツ鳥会議の植松厚太郎。2回目の応募となる今回の作品は、『夕夕方暮れる』。

郊外のお小さな公園を舞台に、ある一週間の夕方の風景が同時進行で描かれる群像劇。心身の不調で会社を辞めた男。妻は彼を支えながらも不倫していた。進学も就職も失敗し、万引き常習犯となった男は、中学生のまま時間が止まっていた。様々な出来事が、ある時は時間が戻る形で展開、ある時は不思議な重なり方をする。同じベンチに座る人同士でも、異なる時間を生きている。別の日の同じ時間に起きている出来事を知らない皮肉。悩んでいることが、実は昨日のうちにどうしようもなくなっていた哀愁。社会から脱落した人と、仕事や家庭を持ち、社会参加している人。何とか社会に適応している人も、心のプラグを抜いているように見える。

佐藤信氏は「発想がおもしろい。定点に色々なことが重なっていくが、ただこの方法で書かなければいけないものは、何だったのか。台詞は書けているが、劇とこの方法が結びつかない。読んでみると、整理するだけで混乱した。舞台を見ると、何かあるのかもしれないが。今年は不倫を描いた作品が多い」と語った。

鈴木裕美氏は、「同じ意見。キャリル・チャーチルの『トップ・ガールズ』という戯曲を演出

したことがあるが、自由な手つきの中に、劇構造の必然が強く伝わった。その手法でしかありえなかった作品だ。植松さんの作品は、手法に飲み込まれてしまっているのではないか。ただ、近くにいたら怖い人の描き方に、非常に好感を持った。その発明にこだわればいいのに」と、指摘しつつ評価した。

佃典彦氏は「手法については、同じ意見。人物は皆、愚かしいが、いとおしい愚かしさがもう少し書かれていると、いいかなあ。人物が皆、依存しているか、執着している人しか出てこないが、もし全くこのドラマに関係のないおじさんがぼーんといたりしたら、この手法のおもしろさが伝わるかもしれない。よくこんな面倒くさいことを書いたなど、敬意を表する」と、評価しつつ指摘した。

樋口ミユ氏は「ひどい人達が出てくる。初めからひどかったのではなく、だんだんこうなってしまう。見捨てたり、見捨てられたりしながら、だんだんと暮れていった人間のグラデーションが描かれていて、私はシースルーレイヤーと名付けたい。彼らを同時に舞台に上げる。ただ、この仕掛けを出すと落ち着くとか、戯曲がそこに行きつけばいいと思うと、広がらないことがある。暮れていく人間関係をもっと見詰められたらよかった。夜のとぼりの想像に、さらに力を込められたかもしれない」と、評価しつつ指摘した。

土田英生氏は「読みにくかった。戯曲の最後に、どの人物がどの曜日に存在しているかを整理した表が付けられていたが、僕には役に立たなかった。曜日の違う人が出てきて、関係がわかっていくところはわくわくしたが、しかし、そうする意味が、僕には見出せなかった。ドラマ・パートも、もう少しディティールをきっちり描いてくれたらよかった。この時間にこだわるなら、午後6時以降に別のものが見えてくるとか、この1週間にこだわった意味が見えると、見え方が変わったかもしれない」と語った。

全員が語り終えたところで、司会の小堀純氏から「授賞対象からはずしていいですか？」と質問がなされたが、佐藤氏が「全作を語り終えてからにしましょう」と意見が出され、以降、どの作品も最初の段階で外されることはなかった。

棚瀬は上演で発見したことを戯曲にフィードバックを

南船北馬の棚瀬美幸は、最終選考会7回目の登場。第15回では『ななし』で佳作を受賞している。2020年に、沖縄県石垣市に移住したが、大阪在住時最後の作品『これからの町』を応募。

妊婦の妻・未果が3年前の災害で行方不明になった悟は、今も家で待ち続ける。悟の妹は、恋人と暮らす家が火事になり、兄の家に居候中。その恋人は若い女性と浮気し、旅行に出かける。

関西の言葉で始まるが、心の距離が明白になるにつれ、逆さま言葉を使うなど、言葉の距離も離れ、「何言ってるかわからへん」という受け答えが重なる。微妙な関係性を丁寧に描写した。

鈴木氏は「私はどこが一番書きたいことなのか、ピントが合わせづらかった。最初に佐藤さんが『今年是不倫を描いた作品が多い』とおっしゃったが、私は、幽霊や不在の者を描く作品も多いと思った。関西弁が標準語になる手法はおもしろそうだが、私はその核に触れられなかった」と語った。

佃氏は「関西弁が標準語になり、別の言語になることが描かれているが、ドラマの内容がなかなか一致なくて、この試みが何の実験なのかわからない。それぞれの人物が抱えているものの深さが違うはずだが、わりと均一に書かれていて、ドラマとしてはずんでこない」と疑問を呈した。

樋口氏は「町と言葉、時間の距離を描きたいのだろう。町への思いや、そこから出ていくことについての作家の思いが描かれている。その核心を、作家本人も見つけられなかったのではないか。言葉が変わっていく点については、演出プランで役者と突き詰めたことが、戯曲にフィードバックされていたら、また違っていただろう。日常、通じ合わないことや、わかり合えない事実を前に、私達がどうするのかの物語が突き詰められておらず、私も核心が見えなかった」と語った。

佐藤氏は「作業の方法が雑。『関西弁』でくくること自体がこの手法を裏切ってしまうところがある。大阪と京都では言葉が違う。言葉への向き合い方とか、自分がどんな言語で書くかなど、踏み込むなら、そこまでいかなければ。よい発想で、いいところまで行っているのだから、もっと丁寧に。ほかには、アンダーラインで書かれた台詞は、他者（俳優）に委ねられている。そこを言語化しないとイケない」と、評価しつつ指摘した。

土田氏は「同じ意見。会話が不得手な人々が、あえて相手の話を受けずに自分の話ばかりしている、ディスコミュニケーションの話だと最初にわかって、その後わくわくしなくなった。関西の言葉が共通語になり、さらに言語が変わり、その先にアンダーラインの台詞が別の言語へと発展する。なぜそこにアンダーラインを引いているのか、わからなかった。稽古していて、聞こえなかったところだろうか？ 僕もロンドンにいた時、大事なところが聞こえず、聞き取れない孤独を感じたことが多々あった。ディスコミュニケーションから孤独を感じてさ迷っていく様が描かれているのかな」と語った。

樋口氏から「上演を見た時、アンダーラインを引いた言葉が、反対語に発展していた。例えば『未果は死んだんですか？』が『かみは死んだんですか？』と発語されていた」と説明した。

佐藤氏から「上演用台本を否定しない。演出で解決すればいいと思うと受容できる作品は多いが、これは戯曲賞なので、上演で発見したことを、応募前に書き足してもらってもいい」という言葉があった。

中村は現実を問題にした時、フィクションとしてひっくり返すことを

空の驛舎の中村ケンシは、『てのひらのさかな』で第10回佳作、『追伸』で第20回大賞を受賞している。最終選考に残るのは14回目と、最多記録を更新中。

『ステインド グラス』は、特別支援学校の職員研修室が舞台。地震により休校になった日、教員達が集まる。多忙を極める彼らに山積する問題。一年前に事故死した児童の公判も始まった。学校前の道路工事現場で重機が横転、アキト君が即死、教員の吉井も重傷を負ったのだ。吉井が出廷を断ったことに、若い教員の田代は不信感を募らせる。

土田氏は「地震による休校の日の先生達の時間を描くという、時間の切り取り方がうまい。少し気になったのは、情報量が多いだけに、説明過多になっているところ。温度が高まる前に、大事なことを長く話している。それと、誰がしゃべっているのか、その都度確かめないとわからなかった。これは誰だっけ？と。人物がしゃべるだけでなく、行動やト書きとともに立ち上がっていると、そのまま読めるのだが。キャラクターが書き切れていないように思う。登場人物が皆ナルシストに感じてしまう」と、評価しつつ指摘した。

佐藤氏も同意見。「情報をたくさん集めている。例えば虹が七色に見えるのは日本人だけで、アフリカ人は四色と思っているなど、おもしろい話ではあるが、情報をたくさん集めすぎると、この芝居とどう関係があるのかが見えなくなってしまう。周辺の情報を集めても、そのものは描けない。教員達は、ここで起きる事件の反応しか書かれていなくて、このシチュエーションがなかったら、どういう人かがわからない。地震の設定も、揺れているというだけになっている。地震が起きると、人間のもう一つの側面が見えてくるのではないか。横山拓也さんにも感じたことだが、作者がうまくなった時に陥るのは、『作者が神として登場人物に役割を与えてしまう』こと。作者は現実のしもべであり、その上で、最終的にフィクションとしてひっくり返す責任がある」と語った。

樋口氏は「傷を負った人々を、ステインドグラスという光に変える物語だと思った。正しくありたい、清くありたいという願いが込められた、作者が切実に書かなければならなかった物語。ただ、作者が一旦カウンセラーである自分に話して、そのカウンセラーがまとめた文章のようで、登場人物の生命力に乗っていないように思う」と評価しつつ指摘した。

佃氏も「問題に対する先生達の向き合い方が描かれていて、僕は誰がしゃべっているのか、登場人物表に戻らなくても読むことができた。ただ、途中で、地震で揺れる描写があり、そうだと、地震で休校になっていたんだと思い出した。地震という設定を忘れていた。学校に集まってきた

が、何もやることがない。本当はそこから何が出てくるのかという、生身のところは必要だと思う。いろいろと何かが起きて、いつもの職員室と変わらない。日常の中にぼっかりした空間を作ったのに、惜しい。先生達の言っていることはよくわかるが、子供達の姿がなかなか浮かんでこない。子供達と劇を作ることだけを、ただしゃべっているだけでもよかったのかな、と思う。台詞も上手なのに勿体ない」と評価しつつ指摘した。

鈴木氏は「毎回最終に残っておられ、実力とテクニックのある方で、毎回、今度こそ、と楽しみに読んで、期待していることがある。それは、中村さんご自身の発明・発見が描かれているかどうか。よく調べていらっしゃると思うが、心を打つのは、そんな人物見たことない、その人にこんなことを言わせるのか、という発見や、書かざるを得なかった人物。来年も同じことを期待して読むと思う」と語った。

2時20分。ここで17分間の換気休憩がとられた。

私的なことも突き抜けると普遍になった小栗作品

『昼下がりのミツバチ』（旧ペンネーム・大正まろん）で第13回佳作を受賞以来、久々の登場となった小栗一紅。『愛しのクマちゃん〜くじらの日々〜』は、劇作家・演出家の故・大竹野正典と、彼のもとに集う人々を描いた作品。くじら「本」会議が朗読劇として上演した。2009年に水難事故で急逝して以来、大竹野の戯曲集の出版や追悼公演を通して、彼を「遺す」活動を続けている小栗ら、くじら企画の関係者達。事故直後や大竹野の通夜の回想とともに、彼の芝居の場面なども挿入。友人であり、劇作家・演出家の大竹野正典への思いが綴られる。

鈴木氏は「書かなきゃいけないこと、どうしても伝えなかった、書きたかった言葉しかない、愛に溢れた作品。大竹野さんを存じ上げないが、そんなユートピアがあるのか、と涙がこぼれる思いだった。ただ、これが戯曲か？というところが疑問ではあった」と評価した。

佃氏も「芝居でドキュメントを書くのは、こういう作業になるのだろう。読みながら、泣けてきた。作者の大竹野さんへの思いが琴線に触れた。僕自身、共感・共有ということに対し、最大公約数を目指すことが多くなっているが、この戯曲には私的な『最小公約数』がぎゅっと詰まっている。○を付けていくらいだが、ただ、大竹野さんを知っている人と知らない人で感じ方が違うだろうと思う。僕は、大竹野さんの『ブカブカジョーシブカジョーシ』を10月に東京で演出しているので、全く知らずに読んだらどうなるのか、確信が持てなかったのが、○を付けられなかったが、好きな作品」と評価した。

樋口氏は「私も大竹野さんを少し知っているのですが、一人で判断できずにここに来たのだが、正直言って最も心が揺さぶられた作品。鈴木さんは、大竹野さんを知らなくても愛に溢れるとおっしゃった。そのとおりで、人はストーリーに揺さぶられるのではなく、ストーリーの向こう側にある思いに感動する。演劇は共鳴できる。小栗さんは大竹野さんに共鳴させられるように書いている。私的なことも、突き抜けると普遍になる。演劇を作るとはそういうことだと、芝居にとって大事なことを書いている。これが戯曲かどうかはわからないが、こういう表現があつていいと発見することができた」と評価した。

佐藤氏は「演劇行為としては違和感がある。僕自身、愛に包まれた世界から演劇が生まれるというところから、脱しようとして演劇をやってきた。劇団がこういうところから成り立つというところを強引にでも反転しないと、社会的役割が果たせず、私的なものになってしまう。演劇は悪意を持ったものである必要がある。ただ、COVID-19の影響があり、いろんなことが露わになって、演劇は、これまで連続でやってきたことを立ち止まり、素朴なところに戻るべきであるのも事実だ。戯曲で書き手の思いが伝わる。それは紛れもなくある。この原点を受け取ることは大事。ドキュメントもあり得る。普段の僕なら推さないが、現在の状況の中で素直に読むと、この戯曲には、真実があり、この演劇行為の持っている強さを感じる」と、指摘しつつ評価した。

土田氏は「皆さんおっしゃる通り、一番素直に感情が動かされたのは、この作品。僕は、大竹野さんと親交を結ばないまま終わったが、知らない人が読んでも、こんなユートピアがあつたんだと心動かされた。報告劇としてよく作られている。事実を前提とし、しかも大竹野さんが亡くな

ったことがベースにあるが、一緒に芝居をしていたら、もっといやなこともあったと思う。けれど、これを読んでいると、大竹野さんは、愛が溢れている。もっと醜いところまで書いた上で、こういうユートピアがあったとすれば、もっと広がりがあったとも言える。ただ、もしかしたらそれをしないことに可能性があるのかもしれない。この後、横山さんの作品を語る時、少し思っていることがあるのだが、僕は『体重が乗る』という表現をよく使う。体重が乗る表現は、理屈を超えて人の心を打つ。小栗さんが体重・気持ちを乗せて書いていることで、大竹野さんを知らない人にまでつなぐ作品になったと思う」と評価した。ここで再び横山の名前が出された。中村作品の所見の時にも彼の名前が出てきたが、今日は横山作品について議論する前から、彼の話題がよく上がる。横山が論議を呼ぶことは間違いなさそうだ。

鈴木氏がさらに「ピナ・バウシュのドキュメンタリー映画を見たことがあるが、ダンサー達がピナのことを持ち上げまくって話していて、いやな話が全然出てこなかった。本当はあったはずだが。私が見たいのは、こういうことじゃないんだ、と思って映画館を出た。でもこの作品を読んで、もしかして、この奇跡のような人間関係、ユートピアが本当にあったのかもしれない信じられるところが素晴らしいと思った」と、さらに評価した。

橋本健司は人見知り

第23回、最終選考会初登場にして『また夜が来る』で佳作を受賞した、桃園会の橋本健司。『わたしは家族』は、心の健康の問題などに取り組むNPO法人こころネットKANSAIから、「家族」をテーマにした作品制作の依頼を受け、アルコール依存症患者と家族から一年を掛けて取材・交流を重ね、作り上げた作品。

「わたし」が、「死んでくれてたらいいのになー」と呟くところから始まる。涙をなくしてしまった彼女が、リュックを背負い、胎児の頃の自分＝きみちゃんとともに、涙を探し、想念の旅に出る。

冒頭、死んでくれることを願った相手は、夫のことだった。明確には語られないが、夫はアルコール依存症のようだ。壮絶な生活を経験。涙も枯れてしまった。わたしが、家族のありようを求め、胎児の自分から見詰め直す過程が描かれた。いつものように、パソコンではなく、手書きで書かれた台本を応募。

土田氏は「一気に読めた。ひとつひとつのエピソード、ディティールに嘘がない。人と一緒にいることに、どこまで違和感を持つのか、人というもののわずらわしさと難しさを描いていて、おもしろかった」と評価した。

佐藤氏は「手書き台本は、得かもしれない。同じ言葉でも、パソコンより言語の遊戯性が伝わる。心地よいリズムが反復しながら、えぐるように入ってくる言葉の運動が魅力的。だが、世界が小さい。今回、全体的に縮小傾向だった。演劇って、もっと奔放に何をやってもいいと呼びかけたい」と、評価しつつ指摘した。

樋口氏は「劇作家の言葉を読む快感があった。色や風景が見え、脳内に映像が次々に浮かんだ。家族の話だが、演劇の暗闇の広い世界を描いているように見えた。ただ、最後の2ページで、その風景が見えなくなった。『わたし』がひとりで語る長台詞のところ。これは、作者が本当に書きたかった言葉なのか？ それとも、わかりにくいと思って、言葉を足したのか？ ここだけ、文字の見え方が違った」と、評価しつつ疑問を呈した。

佃氏は「平仮名の『わたし』と、漢字の『私』がいて、『お父ちゃん』と『おとうさん』がいて、同じ人なのか？と掴むまで時間がかかった。人間の孤独感を肯定しつつ、誰かとつながりを持っていたいという普遍的な、大きな人間の抱える矛盾を、小さい世界で描くのが、すごいな、と思った。作家が書く言葉って、こういうことなんだろうと、改めて思った。死に際、ひとりで死んでいく人の話なのかと思って読んでいると、離婚？あ、離婚の話なのか？と、最後に膝がかくんとあって、○が付けられなかった」と語った。

鈴木氏は「よい意味でも悪い意味でも、『人見知り』という言葉が思い浮かぶ。『私、人見知りなんです』という言葉を使う人がいるが、それは、自分から『私はコミュニケーションが下手

です。あなたのほうから気を使ってください』と言っているようなもんだと、本で読んだことがある。私は『わたし』と『私』が途中までわからなかった。『これは僕のコミュニケーションの方法なので、あとは読む人から歩み寄って読んで下さい』と言っているようで、それがいつも以上だった。ナイーブで正直で美しい作品だと感じつつ、わからない人にはわからなくていい、という、ある種の拒絶を感じた。抱えるテーマは大きいのに、世界が小さい。態度や語り口に、突き付けてくるもの、広い世界に届くところはあるのだが」と疑問を呈した。時間は3時14分。

キタモトは時間と空間を共有する共犯関係を

遊劇体のキタモトマサヤ。最終選考会は5回目の登場だ。『空のトリカゴ―Birdcage In The Sky―』は、架空の町・ツダを舞台にした連作の第9作。バブル景気の後退期、大阪府南部・和泉山脈の麓の田舎町・ツダで両親や姉と暮らす大学4年のシュンヤが主人公。教育学部だが、教員になる自信が持てずにいた。ある日、彼の飼うジウシマツのチーコが蛇の餌食になる。小鳥で腹が膨らみ、鳥籠から出られなくなった蛇を、シュンヤが飼い始める。同じ日、行方不明だった伯父が突然現れる。かつての学生運動家で、逮捕歴もあるらしい。社会に反抗する生き方をした結果、社会的な敗者になったかに見える伯父だが、シュンヤは彼の話に興味を抱く。青年の人生を左右する分水点を劇的に捉えた作品。

土田氏は「おもしろかった。普通の家族の会話から始まり、その奥に闇や虚構を感じ、一人ひとりのキャラクターが際立って、それぞれの立場で語られていた。ただ、伯父さんが出てきてから、意図が透けて見えてしまった。鳥籠は、飼いならされていることの象徴と限定されると、はなじらんでしまう」と、評価しつつ指摘した。

佐藤氏は「台詞が説明的。台詞で何を書くのかという選択に注意が払われていない。戯曲の言葉にしなくちゃいけない。飲み込んだ蛇について、あんなに説明を書かなくていいと思う。言いたいことを言いたい人に言わせる手段がないと、唐突にしゃべり出すことになる。ラストシーンは、何を言いたかったのか、曖昧なところでぼかされている。勿論簡単に捉えられる話ではないし、作者の中では観念的に結びついているのかもしれないが、この芝居とうまく結びついていないように感じた」と指摘した。

樋口氏は「戯曲になると妙な大阪弁になる作品が多い中、大阪の中の大阪の方言を読んでいる快感があった。私が気になったのは、少年が伯父さんをかばう行動をしたことについて、何がそうさせたのか。彼の唯一の現実への抵抗だったのだと思う。この年代の男性にとって、親でも先生でもない、こんな大人見たことがないという、伯父さんの存在が大事なことはわかるが、彼にとってこのひと夏の経験が衝撃でないと、伯父さんによって語られる関空の問題が浮いてしまう。勿論伯父さんがアウトローの生き方をしている、空港ができることで付近の土地の問題もあり、時代と土地の物語が描かれていたと思う。しかし蛇がチーコを消化し、血肉になり生まれ変わるように、少年も生まれ変わるのだろうか。そうだとすると、伯父さんとの共犯関係が作り切れていないのではないかと。伯父さんの武勇伝は聞かせてくれるのだが、共犯関係は具体的に時間と空間を共有して、アクションをすることで生まれる。関空の問題が裾野へと広がり、西成などにも至るということが、お話として終わってしまい、関空と伯父さん、少年の関係が貫かれていないように感じた」と語った。

佃氏は「優しさの奥に熱い塊が内蔵されている印象で、おもしろかった。蛇が鳥を飲み込んで、徐々に消化するみたいに、徐々に庶民が権力に侵食されていく感じと、闘争に身を置いた者が行き場をなくし、自分の正義に追い詰められていくこと。虚しさや、そこに残っている誇り。いろんなものが主人公に入り込んでくる。伯父さんは死んでいるのですよね？ 死んだ伯父さんが帰ってくるというファンタジーがおもしろかった。○を付けられなかったのは、伯父さんと甥の距離感は、寅さんでもそうなんだけど、とてもいいもので、社会的に適合しない伯父さんは、甥にとって影響力があるもの。この主人公は、伯父さんと出会うことで精神的にかき乱されるが、物理的にかき乱されていない。話を聞いて感化されているだけ。関空の話やピンク映画の話や伯父さんではなく、ほかの人、例えばお父さんとか別の人が引っ掻き回されて話し始めると、おもしろ

ろかったのに、と思った」と、評価しつつ指摘した。

鈴木氏は「自分の可愛がっていた小鳥を蛇が飲み込んだのに、その蛇を観察し、チーコが溶けていく様を見る、というのは、私にはもう、何のことだかわからない。だからおもしろく読み始めた。一体、何が起こっちゃうんだろう、と思ったが、あまり大きなことが起きなかった。自分のペットを食べたものを飼う、という行為は、もっと変なことなのではないのか？」と疑問を呈した。

ピンク地底人3号は、場所の空気感、色や臭いも伝える

第24回劇作家協会新人戯曲賞を始め、受賞歴は多いが、OMS戯曲賞としては最終選考会初登場となる、ももちの世界のピンク地底人3号。『カンザキ』は、京都市南区の川沿いの工場地帯にある家電配送センターが舞台。経営者の次男の熾烈ないじめの下、過酷な肉体労働に挑み続ける遙は、実はトランスジェンダー。長男で副社長の純弥は既婚者だが、実はゲイで、妻の妊娠に戸惑う。男達の汗の臭いと、工場地帯の町の臭いが充満する場所で繰り広げられる、デリケートな性の問題。生活の危機や命への不安が焙り出される。

佐藤氏は「大変おもしろく読んだ。人物が生き生きと描かれ、取り上げている世界との距離感がきちんと取られている。一番肯定できる作品。惜しいのはラストシーン（30年後）。これは必要であったか？」と、大きく評価しながら疑問を呈した。

樋口氏は「途中まで〇。男とはどういうものなのか、自分も含め、社会が思い込む既成概念、作られてしまった男の概念を、冷静な視線で疑う物語。ヘタレ・保身・暴れん坊という3人の登場人物がいて、このグラデーションに皆、はまっていく。それを照らし出す批判的な立場として、超越したトランスジェンダーを登場させた。新しい思考回路を作り出している。しかし、男の概念を疑う芝居なら、遙は死ぬ必要があったのだろうか？ 幸せの絶頂で死ぬ遙は、30年後の未来を連れてくるためのものだったのかもしれないが、トランスジェンダーの話とするなら、ざっくりとしていて、描けていない。2020年の今、描くなら、もっと別の描き方があった」と評価しつつ指摘した。

佃氏は「劇作家協会でもピンク地底人3号さんの戯曲は2本読んでいます。この人の書く世界の何がいかと言うと、今回もそうだが、場所の空気感がうまく描かれているところ。ただ、僕もトランスジェンダーを詳しくはわからないが、すごく一面的な感じがした。彼の作品の特徴として、時間が過去に戻って、今と行き来しながら進行するのだが、過去との距離感が効果的ではない。時間は変わっているけれど、人物の考え方の何かが変わっているかという、そうでもない。状況や関係性に変化がなく、大きく違うのは、遙が死んでいること。作者は、何を書こうとしたのだろうか？ 長男の赤ちゃんの名前がひかるというところに希望を感じた」と、評価しつつ指摘した。

鈴木氏は「おもしろかった。場所の空気感が、行ったことがないのに、行ったことがあると思える。音や臭いもしてくる。人物も生き生きとしている。トランスジェンダーについて、佃さんは一面的とおっしゃったが、トランスジェンダーにもいろんな方がいらっしゃる。そのひとつとして、一面的ではない気がした。男とは何かを考える物語。ただ、ラストと、その前の場面がわからなかった。死者となった遙が副社長に『一個だけ日記にも書いていなかったことがあるんです…俺、一度でいいから誰かに抱きしめてほしかった。鎧を脱いでみたかったです』という台詞。抱きしめてほしかったことと、鎧を脱いでみたかったことの二つある。一個ではない(笑)。それと、遙は幽霊になるだろうか？ 思い残すことがあるから幽霊になって出てくるのだとすると、それが鎧を脱いで抱きしめてほしかった、ということなのかもしれないが。幽霊となって出てくる人なのか？ 皆さんのご意見をお聞きしたい」と、評価しつつ疑問を呈した。

土田氏は「確実な力量。京都の南側の地域の臭いを、そこで育っていないにもかかわらず、ディテールまで細かく生々しく伝えている。市井の人々がよく書けている。僕が読んだ3作とも時間をずらしながら毎回死者が出てくるが、今回は、死んで出てくる意味が掴めなかった。以前の作品では、生に対して未練のある人が出てきた。今回は、事故死。死者にならなかつたら語り

えなかったことを語るとか、違う角度から世界が見えることについて書かれていたら、よかったのだが。最後、とっちらかったかな」と、評価しつつ指摘した。

それについて樋口氏が「遥の幽霊は、副社長の願望だと思って読んだ。そこにいてほしい、という願望だったのではないか。副社長は生きていて、男だから言えなかったことを、もうここにはいない遥に言っている」と語った。それを聞いた鈴木氏は「遥の幽霊は実体ではなく、副社長の願望というのは、どの根拠によるものですか？」と問い掛け、樋口氏は「生きている人間だからこそ見たいものという意味。どの台詞でわかった、ということではない。あえて言うなら、遥がやけに饒舌なところ」と答える。鈴木氏は「お客様に伝わらない可能性がある」と指摘。樋口氏は「私がそう読んだということ。遥はよくしゃべって、突き付けていく。聞かれたかったのは、副社長のほうではないか？」と答える。鈴木氏は「もしそうなら、私はそっちのほうが好きだな。副社長が呼び起こした思い出というほうが好き」と語った。土田氏は「それはあるかもしれない。でもそこが整理されていない」と語る。鈴木氏は「抱きしめてほしかった、ということと、鎧を脱ぐ、ということは、副社長が脱いでいるところを見たかったということなのか。だとすると、すっとする」と語る。土田氏は「二つ、ということについてだが、抱きしめられたら、鎧が脱げるということなのかな」と語る。樋口氏は「自分の思いを投影する存在と感じた人と、ほんとに幽霊がいると思った人で、定義が違ってくる」と語る。土田氏は「遥が見えるのは副社長だけなので、副社長の願望と言えなくもないが、遥が副社長に伝えたかったことではあると思う」と語った。

通常、選考会で全作品を個別に語る最初の段階では、各選考委員それぞれの所見が述べられるだけなのだが、今日は、この段階ですでにピンク地底人3号の作品についての、踏み込んだ議論が始まっている。時間はすでに4時16分。

山本は知らなかった世界に確実に連れて行ってくれる

コトリ会議の山本正典は、第25回、『あ、カッコンの竹』で、最終選考会初登場にして佳作受賞。さらに第26回、『しずかミラクル』でも佳作を受賞。昨年の授賞式で「2年連続佳作で嬉しくもあり、悔しくもあり…。来年挑戦する気合を頂いた」と受賞の言葉を語っていたが、今回はどんな評価を得るのであろうか。

『セミの空の空』は、ヒトが二つ目の月を作り、その光の力で眠るの必要がなくなった時代。多喜男の妻・雪子がいなくなる。電車にはねられたらしく、多喜男は線路で妻のDNAを探す。一方、雪子の妹の万智が帰宅すると、両親が蟬になっていた。登場人物が次々に亡くなり、多喜男だけが残る。だが死者も存在し、第二の生を営む。

死者達の語れなかった言葉、遺書にも残せなかった言葉が溢れる。新たな「死者語」として蘇ったような、独創的な台詞が綴られた作品。

樋口氏は「好きな作家。台詞が愛おしい。見えないものを見ようとするのを、ひたすら行っている尊い書き方をする作家。ひっかかるのは、今回はあらゆることが見えていく設定だが、見えるようになった時、どんな世界が立ち上がるのかが書かれていない。私達も、生きているのか死んでいるのかわからなくなる時がある。月という設定は、なくても書けたのではないか？」と評価しつつ指摘した。

佃氏は「ものすごくおもしろくて、不思議な世界と生々しい世界が混在していて、ずっと興味を引っ張られた。僕は、二つ目の月はスマホのことかなと思った。スマホの光があると、夜なんだけど夜じゃないように、朝まで眠らずにいられる。癒しにもなる。何でも見えるし教えてくれる。人類の作った最大の建造物。それだと思って読んだ。SNSが普及してから、世界中に自殺者が圧倒的に増えた。その現実を絵本みたいに書けるセンスが、すごい技量。冒頭の『二酸化炭素』という台詞は、なんのこっちゃこれ、と思ったが、吸って吐いての息遣いのことだとわかった。蟬が頭にくっついていることなど、わからないところはあるけれど、絵本のように書いているのが、ただただおもしろく読んだ」と高く評価した。

鈴木氏は「今、月がスマホだと聞いて、もう一度作品を頭から読み返したいと思った。こうい

うことがあるから、選考会は、なるほどねーと思う。私にとってチューニングが少し難しい作家だと今まで感じていたが、今回はチューニングしやすかった。今まであっちこちにアイデアが飛んでいたのが、すごくまとまっている。言葉のリズムのセンスが美しく、頭に蟬がついているのもおもしろい。長い電車の音のSEとか、すごくいい。DNA探知機とか、素敵なアイデアが十分に楽しめた。ひとつひとつのアイデアが何かにつながって、ぶれていない」と評価した。

土田氏は「抽象的な作品だが、最後までおもしろく、結構笑えた。僕は二つ目の月はコロナだと思っちゃった。今まで僕らが考えてフィクションとして描いたら、ありえない、と突っ込まれたようなことが、コロナによって実際に起きた。無症状の人がいるとか、基礎疾患のある人は危ないとか、匂いがなくなることとか。常識だと思っていたものが常識でなくなったことを、二つ目の月が表していると捉えた。生きているのか死んでいるのかわからないことが、延々書かれている気がして、心に響いた。あまり物語の表に出てこなかった武や淳の、取り戻せない様相もリアルに感じる。少し気になったのは、ラスト。死んだ理由はいらないが、ここでファンタジーをいい方向に終わらせてくれたら、さらに楽しめたかなと思う」と高く評価した。

佐藤氏は「作家性が確実に開花している。何にも頼らず一から世界を自力で作っている。だったら、『あ、カッコンの竹』で大賞を出すべきだったと後悔している。『カッコン』の広がりまでには行っていない。僕はかつて線路工夫になりたかったことがあり、そして最近、人身事故にも遭遇し、死体の処理について最初から最後まで見ている。だから生々しくイメージできてしまうところがあるからでもあるが、作家は現実と、自由に世界を作ることのバランスを忘れてはいけないと思う。演劇は尊厳にかかわる仕事。ただ、おもしろいということでは抵抗はできない。とは言え、作家にとって一番要求されることがオリジナリティだとすると、誰もやらなかったことをやっている。知らなかった世界に確実に連れて行ってくれる。ラストは、終わらせるためにつけたもの。これがないといつまでも続くから。山本さんはストーリーが書きたいわけではなく、世界が描きたい作家」と指摘しつつ高く評価した。

樋口氏が「月がスマホということで腑に落ちた」と語った。佃氏は「万智さん（死んだ雪子の妹）の存在に救われた」と語る。鈴木氏は「『二酸化炭素』というのは『生きてる、生きてる』の意味」と語り、土田氏も「僕もそう思った。また、抽象的な設定の中で笑いが取れるのは、相当な力だと思う。普通は現実の盾があって、笑いに結び付くものだが」とさらに評価した。時間は4時40分。

横山はドラマを作るために人物を病気にしていないか

iakuの横山拓也は、すでに日本劇作家協会新人戯曲賞を始め、数々の戯曲賞に輝く実力派。OMS戯曲賞では第26回に『逢いにいくの、雨だけど』で佳作を受賞しているが、大賞はまだ受賞していない。最終選考会8回目の登場となる今回は、どんなエールが送られるのか。

芸大生の千夏は、母と二人暮らし。幼馴染の光輝を密かに慕う。母は離婚後、懸命に働き、娘を育てたが、新任の上司に好意を抱き、久しぶりに女としての自分を意識する。そんな中、千夏が乳癌と判明する。さらに、千夏が姉と慕う、母の同僚の透子に、光輝が恋をする。

鈴木氏は「横山さんは、ものすごく応援したいと思っている。山本さんとは違う種類の才能で、この作品も、ものすごく笑った。75ページの『昭子は冗談にしてしまうことを選び』といったト書きもわかりやすい。ちょっとしたことで悲しくなったり嬉しくなったりする少女の気持ちも、よく書けている。ただ最後がわからなかった。誰にも触ってもらえない娘の乳房を、母に触ってもらうところ。ものすごく気持ち悪いのは、私だけですか？」と疑問を呈し、土田氏が「わかる。気持ち悪い」と賛同。さらに鈴木氏は「どの人物も生き生きして愉快で、嘘がない。最後が腑に落ちれば、とても演出してみたい作品」と指摘しつつ評価した。

土田氏は「横山さんを応援したい人の中でも、僕は筆頭だと思うが、少しよくない方向に行っているなど、生意気かもしれないけど思った。去年の作品（『逢いにいくの、雨だけど』）でも、目を突く必要があったのが疑問だったが、今回も乳癌の扱いが、あえてドラマを作るために使ったように思えた。会話や、日常の『あるある』を見つける能力は抜群。ただ、ドラマを作るた

めに書いている気がする。演劇は皆が口にしてしている喜怒哀楽の先にある、見えないものに気づかせてくれるものだと思う。さっき『体重を乗せる』という言葉を使っているが、書きたいという衝動が奥にないと、表面的な作品になる。千夏が、大学の課題で書いた自分の小説を読むところも、ほんとにそれを書きたかったのか。圧倒的な巧みさに対しては、皆さん異論がないと思うが、その辺が感じられないのがつらかった」と評価しつつ指摘した。

佐藤氏は「土田さんの意見に賛同する。以前、焼却炉に高校生が閉じ込められ、焼け死んだ作品を読んだ時にも、現実との関わりについて指摘したが（第15回応募作『コクジンのブラウス』）、この作品でも乳癌で、しかも学生。乳癌が道具として使われている。横山さんはすごく好きだし、今回も読み始めた時、今年大賞を取るといいなと思っていたが、あの指摘が伝わっていない。今回は演劇的ではない、つなぎの場面も多い。第25回の『粛々と運針』で二つのシーンをつないで、苦労して書いたことが、やすやすとこっちへ展開しちゃったか。書くことを急ぎ過ぎてはいないか？ 需要があるので、応えようとしているのか。作家性に戻ってきてくれるといいのだが。取り上げた対象に対する姿勢、その現実に対して作家としてどの位置に立つのか。そこが本当に勿体ない。誠実にこの賞に出してくれる熱意もわかるし、とても勿体ない。早く（大賞を）取ってくれ」と、愛を持って指摘した。

樋口氏は「最後は気持ち悪い。これは感情的に言っているのではなく、そこに批評性がないから。この物語を書いた向こう側に、何を描きたかったのかが見えなかった。男女で分けて考えているわけではなく、横山さんは多くの人の『あるある』を読み解くのに長けておられるからこそ、今、女の人はこんな風に見られているのかということがわかって、気持ち悪かった。劇作家は寄り添って書く、ということがよく言われるが、寄り添って書くということは、本当にあり得るのか？ ペンやパソコンで『火事が起きた』と書けば、その世界では火事が起こしてしまう。人を殺したと書けば、人を殺せてしまう。地震も起こせる。劇作家は常に加害者だと思っていないと、なんでも書いてしまえる。そのことを常に思っていないといけない。自分の指先、ペン1本で18歳の女の子に乳癌も作ってしまえる。女の子に乳癌を作って、何を書きたかったのか？ 私は読み解けなかった。乳癌を作らなくても、書けたのではないか？」と指摘した。

佃氏は「単純にうまいな、と思った。乳癌の指摘が出ているが、確かに18歳の女の子が乳癌だと言えば、彼女は乳癌になってしまう怖さはある。日常のことを日常として書いて、悪い人は誰一人出てこなくて、悪い人がいないのに、話がこんなにこじれて、何でもないように切ない話を書けるのは、すごいな。何でもない普通のことを普通に書きたいと僕は思っているが、それができなくて、天井から土管が突き出てみたり、何か突っ込まないと日常が描けないから、とてもうらやましく思って読んだ。千夏が自分の創作した小説を読むところも、あれは『初恋の思い出』を課題に出した先生が悪い（笑）。時代ものを書けとか、SFを書け、という課題なら、こうはならなかった」。土田氏は「それはそう思う。薄っぺらい先生ですね」と賛同した。

さらに土田氏は「乳癌を使って書く場合、例えば検査で引っかかって再検査を受けるまでの時間に、こういうことが起きた、という書き方ならわかる。検査の結果を待つ間でも、母と娘が思いを異にして、同様のドラマは起きる。で、検査の結果、大丈夫だった、というならいいが、この作品では、検査の結果、二人で病に向かわなきゃ、で終わるので、ドラマの道具立てとして乳癌が使われている気がしてしまう。それと、千夏が好きになる光輝についてだが、透子と出会ったその日のうちに、すぐに電話してラブホに誘うって…。性欲真っ盛りだったとしても、どういうことですか。若い子のダメなところを描くならわかるが、そのわりには透子に失恋して本気で悩むじゃないですか。本気で好きになっている。千夏のお母さんの上司の木村さんもヒドイ（笑）。お母さんが自分に好意を持ってくれていることくらい、いくらなんでもわかるじゃないですか」。そのツッコミに、すかさず鈴木氏は「いる。光輝君みたいな人、知ってる」。佃氏も木村さんについて「わかんないもんなんだよ、悪意なく言うやつは」と擁護(?)する。さらに土田氏は「ハッピーエンドでなくてもいいけど、お母さんを傷つける道具として木村さんが使われているのが、いや」と付け加える。

鈴木氏は「先ほどの批評性の話だが、私自身にも突き付けられている気がする。私は世の中に批評性を持って演出できているのか？と。横山さんは、社会がこうにあるということを書け

いにすくって、ここにもってきてくださる。ちょいバカ、ちょいお調子者、基本的には善良な人。それを丁寧に舞台に持ってくるのは、なかなかできないこと。さっきから私、横山さんの擁護をしています(笑)、もはやきつとご批判があると思っているから、擁護しています」と言うと、土田氏は「勿論です。もしほかの人が批判したら、僕は横山さんの擁護に回ります」と語る。

さらに鈴木氏は「私は演出家ですが、作家が何を美しいと思っているのかをお客様に伝えるのが仕事。スタッフと俳優には得をしてほしいと思う。この作品は俳優を美しく見せられる自信がある。山本正典さんは、俳優ではなく、山本さんが素敵と言われる」と擁護した。

樋口氏は「横山さんは、『これはドラマです』と持ってこられるが、自分の中で痛みのないものを持って来る癖がある。自分をもっと信じればいいのに」と語った。土田氏は「少し焦りがありますか？ 評価されようという焦りがありますか。大丈夫ですよ、力があるんだから」と。

決して上からの目線の批判ではなく、作家の目線に立ち、何という親身なアドバイスが続くことか。受賞はしてほしい。だが、それはこの作品ではない。だんだんと、まるでどうすれば横山が受賞できるか、真剣に話し合っているようにさえ見えてくる。それは横山に対してだけでなく、他の候補者に対しても。私もいろんな選考会に出席してきたが、こんな選考会をほかで見たことがない。そして、何と会話の巧妙な選考委員が揃ったことか。時間経過とともに、各委員のキャラクターが際立ってくる。絶妙な間合いと、機知に富んだ受け答え。選考会自体が、一つの演劇作品のようだ。さらに今回は、他の候補者の作品の論評の間にも、何かと山本、横山が引き合いに出されるのが興味深い。選考委員の心に、いろんな意味で響いた作品なのだろう。

9作の講評が終わった。時間は5時5分。15分の休憩の後、投票が行われることになった。大賞作に一つ、○を付けるものだ。

山本とピンクの決戦

5時23分、結果が出た。山本作品に鈴木氏、佃氏、樋口氏が投票。ピンク地底人3号に佐藤氏と土田氏が投票した。司会から「大賞候補は、この2作に絞っていいですね？」と確認がなされ、全員が賛成した。

再論議はピンク地底人3号から。まず佐藤氏が「山本作品が授賞になっても反対ではない。ただ山本さんは『あ、カッコンの竹』から続いてきた流れの中で、この作品で大賞ということに、少し待ったをかけたい。もう一つ先に行ってほしいという思いがある」と語った。土田氏は「僕も山本作品が大賞になることに全く反対ではない。山本作品は、読者としておもしろく読んだが、うまさの正体が僕には、ちょっとわからない。ピンクさんは、明らかにこういう技術が優れていると、確信を持って言える。相対的にみてピンクさんに入れた」と述べた。

樋口氏から「前回と比べることなく、山本さんが作り出す劇世界そのものを推す。応募者にとって、前回と比べられることが一番いやだと思う」。すぐに土田氏から「それは全員そう」と賛同する。さらに樋口氏は「作家性として山本さんを大賞に推します」と語った。

佃氏は「前と比べるのは、そんなに意味がないということは、わかっているんですけど。『カンザキ』の場所の空気感が伝わるのもわかる。山本作品を読むのは2回目だが、正体が掴めないという意味では、名古屋に天野天街(少年王者館)という宇宙人がいるが、正体が掴めない。ここがいいとかよくないとか、突っ込んでも、そもそも意味がない感じ(ここで全員から「そうそう」と、共感の笑いが起きる)。逆に言えば、それくらいすごいと思っている。山本さんも、単純におもしろかった」と山本作品を推す。

鈴木氏は「選考委員に就任する前の年、選考会を見学した。その時、選考委員が『前回、この方は～』とおっしゃることが多く、びっくりした。特に渡辺えりさんが細かく記憶しておられ、OMS戯曲賞の愛情深いところを感じた。作家はひとつずつ作品を評価してもらいたいと思っている。継続して読んで、こう成長している、という読み方も、それは丁寧に愛情の深さだと思う。選考委員が台詞をそらんじていることにも、驚愕した。何度も出して下さる方に対して、前の作品と比べていくことを、私はそんなにひどいこととは考えていない。山本さんとピンクさん、どちらも好き。どちらが大賞を取られても不満はない。どちらを演出したいかと言えばピンクさん。

俳優やスタッフとともに、ピンクさんの書かれている通りのことをきちんとやろう、ということのみならず、もうひとつ違う世界を一緒に作れる。どこかに行ける。山本さんの世界は、行けるかどうかかわからないが、行ってみたい。どんなところに行けるのか、どんなことが起きるのかわからないが、行ってみたい。戯曲賞の意味、何に比重を置くかで変わってくるが、演出したいのはピンクさんのほう。でも、読み物として、山本さん、すごくない、これっ!?!と思っちゃうんで、戯曲賞だと考えると、山本さんになる」と、山本作品を推す。

そこで土田氏が「確かに山本さんは圧倒的なオリジナリティだが、ピンクさんも相当だと思う。具象で書かれている中、これだけ多彩な登場人物像を描き、なおかつ、場の空気感、底辺の人々の空気感を露悪的にならず伝えたのは、相当なオリジナリティだと思う」とピンクを推す。鈴木氏は「私もそう思う」と相槌を打つ。

司会から「佃さんは、山本さんですか？」と問われ、佃氏は「うまく言えないけど、先ほど、信さんから、山本さんのその先を見たいという言葉があったが、僕は、山本さんはこの先も変わらない気がする。ピンクさんのほうが変わる気がする。今の時点で僕の中では山本さんが相当おもしろいので、山本さんの授賞が良いと思う」と語った。土田氏が「落ちる時、前のほうがよかったと言われるのが、作家にとっては『じゃあ、前の作品でくれよ』と思う。僕は、ピンクさんは意外と次に行くのに時間がかかる気がする。前作の『鎖骨に天使が眠っている』のほうが、広がりがあったと思う」と、話が作家の未来にまで及んできた。そこで樋口氏から「前の作品と比べることを否定するものではないが、山本さんにはゆるぎないものがある。ピンクさんは冷静に分析しているところを、本当に評価している。その上で、もうひとつ向こう側を考えたかったはず。私は、そんなにかからないと思う」と語った。

佃氏は「僕がもしピンクさんに、次回作をお願いしたとして『ワンシチュエーションで書いて下さい』と言ったら、書いてくれる気がする。山本さんには、そのオファーすら出てこない。先に行く行かないではなく、十分おもしろいものがピンクさんには書ける」と語る。

佐藤氏は「僕は、今でなければ山本さんを推薦したと思う。僕は今、演劇に興味がない。今やらなくちゃいけないことは、演劇に興味がない人に届けることだと思う。その意味で、小栗作品を語った時、素朴に戻ろうと言った。ドキュメンタリーということも含めて。今、芝居を作っている人にとって、とても難しい時代。これまで走ってきて、築き上げたものが、通用しなくなるかもしれない。山本さんは才能を勿論認めるが、普通の人が見ておもしろいだろうか？そこにクエスチョンが付く。今回、COVID-19という経験を山本さんもしているので、それが彼を変えることがあるのではないかと語る。それを聞いた佃氏が「OMS戯曲賞は、大賞を一度取っても、次も応募できるんですよね」と問い掛け、司会が「そうです」と答える。佐藤氏は「授賞を反対しているわけではない」と付け足す。

ここで司会の小堀氏から「北村想さんが選考委員を10年してくださったが、想さんは『俺は、自分が書けない作品に大賞を出す』と言ったことがあった」と語ると、佃氏は「俺は両方書けない」と語り、土田氏も「俺も両方書けない」と。さらに小堀氏が「山本作品は、去年秋の上演で、まだコロナ禍のない頃に書かれた。先のことはわからない。以前、ある劇作家が私に『俺は、一晩で書けるかもしれない。でもしばらく書けないかもしれない』と言ったことがある。司会が言っただけじゃないが、作家の次に何かあるかどうかはわからない」と語り、土田氏が「この作品で評価したほうが良いということですね」と語った。小堀氏が「もう一度お考えいただきたい。10分休憩して、もう1回投票をお願いします」と語った。

鈴木氏が「絶対にどっちじゃなきゃとは思っていない」と語り、小堀氏が「多数決という方法では決めてこなかった。それは尊重したい」と語った。

両者互角。再論議

そして10分後。鈴木氏が「ほんとに困りました」と語り「もうちょっと話してもいいですか？」と提案。投票ではなく再論議が始まった。時間は6時。

鈴木氏が「18歳の女の子の胸に乳癌を作るという話があったが、ピンクさんの作品で、遙の死には、とんでもない。自転車で理由なく突然死ぬ。しかしこの描き方は、劇のために殺したのではなく、人ってそうやって死ぬので、そこはいいなと思っている。私が考えちゃっているのは、演劇は打撃を受けているが、山本作品とピンク作品のどちらが希望だ？と考えた時、どちらも希望だという結論に達した。しかし、山本作品のほうが、この演劇があつてよし！という演劇の未来への希望、生きる希望が湧く気がする」と語る。

すぐに佃氏から「毛色の全く違う作品で、唯一共通しているのが、人が死んで霊となって現れる点。その時、僕が山本さんを何故推すかという、人は死ぬ時、命を設定する。設定しないと、宇宙の迷子になっちゃう。雪子が夫の多喜男に設定したように。それはいつでも会えるように。ずっといられるかもしれない希望というか。僕、自分のことを話すのもあれなんだけど、携帯に死んだ人がいっぱいいる。消せない。深津（篤史）くんも、皆ここに残っている。死んでいなくなった奴と、どうまた出会うことができるのか、交信できるのか。少なくとも、あいつはここにいますかと思えるのか。そこに興味があつて。『カンザキ』では、遙が死んで現れるんだが、山本さんの本は、死ぬ時に『じゃあ、あなたは、どこに設定する？』というところが、とても好き。人が死んでいなくなって、でも、いる。両作品に共通していることだが、山本作品の人の居方のほう、死者とのつながり方のほうが、僕には希望が持てる」と語った。

樋口氏は「設定しないと宇宙の迷子になるという話だが、死ぬ時と同様、生まれる時も、この肉体に生まれてくると、愛しい者の前に生まれてくるとを設定する。私は、山本作品は、生まれる前の設定だと思った。両作品とも、見えないものを見ようとしているが、山本作品の死と死の境目のほうが、フラット。私は月がふたつあると、目になって空からずっと誰かに見られている、監視されている。とすると人は気が狂って、本来の生きる本能がずれて死にたくないのに電車で飛び込んでしまって、機能が壊れていく現在を描いているとも思った。現実に見えているもの以外にも、あるかもしれない、という考え方が、これから大切と思い、山本作品を読んだ」と評価した。

その後、『カンザキ』の遙は自殺か事故死か？という論議が続き、さらに土田氏から「そもそも死ななくていいかもしれない。遙が活着している間に伝えられず、死んでからわかったことがあれば、出てきてしゃべることはある。その点の変化がない。副社長は、遙を鍛えてほめて、仕事をやらせていたことが、遙の死につながったと思って一旦ダメになる。そこに遙の母が出てきて、いろんなことがわかって、副社長が呪縛から逃れ、楽になる、という構造だと思うが、振り返る時間がなくて、1年前と差がない」と指摘。

佃氏は「時間のスパンが近かったからだろう」と答える。樋口氏が「赤ちゃんだと思う。（副社長の妻が）妊娠して生まれるまでの時間という設定だったから」と答える。

土田氏は「山本作品の授賞で不満はないが、僕が唯一気になるのは、未来への希望が論点だとすると、山本作品の最後のところ。蟬の抜け殻が花びらに似ているという状態になり、花びらが蟬になり、籠の中にいる。淳と武が最後、設定してなくて、迷子になりそうになり、行くところがなくなって、実家にでも帰ろうということになる。そして二人とも実家が福井とわかって、一緒に帰ろうとする。そこは笑って泣いたのだが、そこで花を撒く。けれど、もうこの世界では、花くらいで駅員は電車をとめないと書かれている。今、人が死んでいく中、芝居を書くということは、どういうことなのか。先程の信さんの『素朴なところで書く』という話でいくと、人が死ぬとはどういうことか、人が横にいてコミュニケーションを取って生きるということがどういうことか、について考えるとすると、僕は希望があるように思わない。勿論、いつも『活着しているからいいんだ』と書いているのではなく、時空を超えたところで世界を書いているのだが」と語る。

佃氏は「ぼやかしている。生と死がすぐここにも、そこにも。おおっ！て返してくる、ということのほうに、僕は希望を感じる。人が死んでも、悲しまなくてすむ装置。だから（アドレスを）消せない」と語った。

ここで投票となった。鈴木氏が「この2作から大賞と佳作ですかね？」と問い掛け、司会が「この2作に絞られている。残った7作から佳作は出てこないのではないですか」と答える。

最後の投票

6時30分、3回目の投票が行われた。順番に答えていく。佐藤氏と土田氏がピンク地底人3号、佃氏と樋口氏が山本正典。2対2となったところで、両作とも高く評価し、最も迷っていた鈴木氏が最後の投票者となった。皆、固唾を飲む。鈴木氏から「山本さん」という声が響いた。ここで司会が「山本さん大賞でよろしいですか？」と問い掛けた。すぐに全員から拍手が起き、山本正典の大賞が決定した。次に佳作について再度投票するかどうかを、司会が問うと、佐藤氏が「山本さんが大賞なら、ピンクさんの佳作で異議がない」と答え、全員がそれに賛成した。6時33分、ピンク地底人3号が佳作に決定した。

未来の光～授賞式

感染予防のため、授賞式には最終候補の作家と報道関係者、劇団員など若干の関係者のみの参加とし、授賞式と公開選評会は、ライブ配信された。

受賞者は、それぞれ自作が選ばれたことへのお礼の言葉と、劇団員など公演関係者への感謝を述べた後、山本正典は「この芝居は、神戸・東京・久留米で上演させて頂きましたが、神戸公演を見に来てくれたピンク地底人3号さんという方から、終演後『いつまでこんなことをやっているんだ』と叱咤激励頂きまして（会場爆笑）、死に物狂いで書き直して東京公演を行いました。そのおかげで受賞できたと思います」と、ピンク地底人3号への感謝の言葉を語った。

ピンク地底人3号は「僕と山本君は、20代からお互い芝居をしてきて、年も一緒に、二人とも20代で芽が出ませんでした。でも、僕が意識していた作家は、山本君だけです。素直に、大賞受賞おめでとうと言いたいです。他の戯曲賞では僕が勝っています（会場爆笑）。これで1勝1敗です。別のところでまた争いたいです」と語った。

主催者の言葉として、大阪ガス株式会社近畿圏部長の田中雅人氏から、選考委員や関係者、来場者やライブ配信視聴者へのお礼の言葉の後「扇町ミュージアムスクエアが閉館して15年以上経ちますが、今年も54作の応募を頂きまして、ご注目頂いていることに感銘を受けます。今後も関西演劇界の発展に寄与したいと思います」という言葉があった。

公開選評会では、受賞作について選考委員全員がコメント、他の最終候補作品は、選考委員一人が代表して講評を述べた。選考委員が発言中に、場内にいる劇作家に質問し、コミュニケーションを取る場面も見られた。佐藤氏が中村ケンシ作品について「同時発語の指定があるが、それを選択した意図がわからない。戯曲は、それが無いという前提で、一人ひとりのモノローグやダイアローグを取り出して書くものだと思う。あえて同時に発語されると、聞き取りにくい」とコメント。司会の小堀氏が、中村氏に発言を求めた。中村氏は「まじめな会話と、どうでもいい会話をしている人がいて、まじめな会話を、どうでもいい会話が邪魔したり、また、どうでもいい会話が重要になってくることもある。どの言葉が聞こえてくるかは、計算しているのですが」と答える。佐藤氏は「それを分散して書けないかな？僕は同時発語については、ムキになるところがあって（笑）。分散して精密に書けないかな。どうでもいい台詞は存在しないと、演出家としては考えます」という提案があった。

最後に小堀氏から「今年はコロナ禍で上演できなかった作品も多いので、第28回は未上演作品の応募でもいいことにしています。よく言われることですが、小説家は言葉を書き、劇作家は肉体を書く。逆に言えば肉体を書けるのが劇作家です。ピンク地底人3号さんの作品が、一番肉体が見えた。他の作品からも声が聞こえてきた。顔が見える。それはその人にしか書けない作品です。例年にも増して密度の濃い選考会になりました」という言葉があった。

さらに佐藤氏が劇作家達に向けて「COVID-19はとても大きな出来事です。それが起きて世界がどう動いたのか。文明史的な、大きなことが起きた大事な時代に、私達は生きています。演劇は集団作業ですが、劇作家はたった一人で始める仕事。劇作家は、今仕事をすべき時です。まず、今起きていることは何なのかを記録する。直接題材にしなくてもいい。大きな切断がありますが、それは絶望だけでなく、次の萌芽もあります。それを拾い上げられるのは、劇作家です。もし今、

つかこうへいという人が生きていたら『一番うまいコロナのかかり方』という作品を書くだらう。そんな言葉以前の、言葉にならない本質を掴まなければならない。そして、資料をたくさん読むこと。例えばウィリアム・H・マクニールの『疫病と世界史』。これを読んでいたら、コロナが来た時、全然違っていたと思う。直接それを書かなくても、遊園地の話でも竹藪の話でもいいのだが。演劇人は、今ほんとに役割を問われている。演劇は滅びない。それは、間違いはないです」と語った。

それを聞いた小堀氏が「キタモトマサヤさんがかつて所属していた満開座の、仁王門大五郎さんが、『OMSとその時代』という単行本で『大きな時間が小さい時間を押しつぶしている。でも、小さい時間が大きな時間を作っていく』と書いていたことを思い出しました」と語った。ここで授賞式と公開選評会が締めくくられた。

特別な状況下で実施された第27回のOMS戯曲賞であった。

授賞式の開式直前、客席最前列に座っていた山本のもとに、背のスラッと高い男性が駆け寄り、まるでわがごとのように喜びながらお祝いを告げ、山本も立ち上がり、固く握手している姿を目にした。私は「よほど厚い友情で結ばれた人なのだろう」と遠目に見ていたが、後から考えると、それがピンク地底人3号であった。授賞式後の写真撮影でも、ピンク地底人3号がさりげなく山本に小声で「マスクをとったほうがいいよ」と促すなど、何とも微笑ましい関係。二人がともに過ごしたこれまでの長い時間を、私は知らなかったが、授賞式で垣間見た、この小さな、ささやかな交わりの時間に、光明を見た。

盟友二人のニューヒーロー誕生。新型コロナウイルスで大打撃を受けたが、関西演劇界は大丈夫。そう思える、温かい光に包まれた夜だった。

(文中一部敬称略)